

「さらなる悟り」

ダニエル書 9 : 20 - 27

September.27.2020

**ダニエル 9 : 20 - 27 (パワポ)**

**Preface**

先週も見ましたように、ダニエルが自分の罪と自分の民イスラエルの罪を告白し祈っていると、祈りの応答を携えて、神に遣わされた天使ガブリエルが、すばやくダニエルに近づいてきて語り掛けます。

**ダニエル 9 : 22 - 23 (パワポ)**

今、ここで、天使ガブリエルは、すばやく飛んで来てダニエルに近づいた理由を、「悟らせようと、そして、その悟りによってダニエルを賢明にしよう。」とすためだと言います。

でも、ただ、ここで、ちょっと引っかかるのは、これまで9章を見てきましたように、ダニエルは、ダニエルなりに悟ったことがあって、「神はあなたを特別に愛している。」と言われるほどの祈りを、断食をして、粗布をまとって、灰をかぶって、哀願をもって祈ってまいりました。

なのに、そのダニエルの悟りだけでは足りないと言っても言うかのように、さらなる悟りを与えて、賢明にしようと言うのです。

ダニエルが悟ったことをもう一度見てみましょう。

**ダニエル 9 : 2 (パワポ)**

ダニエルは、預言者エレミヤによって書かれたエレミヤ書を読んでいくうちに、自分たちイスラエルが滅びた理由が、神の民として生きることを忘れ、神の言葉に生きようとしなかったためであることを悟りました。

またそれと同時に、70年間の捕囚の期間が終わり、故郷エルサレムに、そしてイスラエル民族に回復と復興が起こることを悟らされました。

そして、ダニエルは、祈りました。

良い物しか下さらなかった神様に対して、恩に仇を返すかのように生きてきてしまった自分の罪と、自分の民イスラエルの罪が、申し訳なくて、申し訳なくて、申し訳なさ過ぎて、

また、そんな罪人である自分たちに、再び、癒しと回復と新しいことを成して

くださるという恵みが、申し訳ないほどにありがたくて、祈るわけです。

イスラエルの滅びの理由と、復興の希望を悟ったそんなダニエルに、神からの祈りの応答を携えてきた天使ガブリエルは、「さらなる悟りを与えよう。」と言うのです。

つまり、一王国イスラエルの滅びと復興だけが、神が示し、与えようとしておられる悟りではないということです。

## Part One

じゃあ、何をダニエルに悟らせようとしておられるのか？

### ダニエル9：24－27（パワポ）

今ここで、神様が天使ガブリエルを通して与えてくださった御言葉は、ダニエルにとってもそうですし、私たちにとっても不透明なところがあることは否めません。

でも、よく読み進めてみますと、その要点が、“復興”と“滅び”にあることが、何となく見えてきます。

特にここで目を引く言葉は、“70週”という言葉ですが、

イスラエルの荒廃期間が70年で、その後復興があることが定められていたように、今、神が何かことを成すために、70週という期間が定められていることを、まずダニエルは教えられます。

年と週の違いはあれど、“70年”というイスラエルの滅びと復興を表す数にもじって、神様がことを成す**期間**を示しておられるということから、これから神が成そうとしておられることが、また別の“滅び”と“復興”であることを連想させます。

また、70週だからと言って、70年よりも短い周期でなされるものではなく、イスラエルの“滅び”と“復興”とはまた違う、“滅び”と“復興”があるんだという異質性を表わすために、“週”という単位が使われているようにも思われます。

聖書にはたくさんの数字が出てきますが、特にこの“7”という数字は、神様が7日間かけて天地万物を創造され、「非常に良かった。」とおっしゃったことから、完全数字と言われます。

つまり、“7”は、完成を意味する数字でもあります。

だから、これから神様が成そうとしておられることは、“完成を目的としている”というのを、暗に示しているわけです。

さらに、他の聖書箇所ですね、イザヤ書やエレミヤ書のような大預言書でもいいですし、ホセア書、ゼカリヤ書などの小預言書、詩篇、モーセ五書、イエス様のなされた業や言葉が記されている福音書、パウロやペテロなどが書いた手紙、黙示録などの聖書全体に渡る内容に照らし合わせてみますと、

今ここで語られていることが、神の主権による神の国・神の都の“完成”と、神に反する者たちの“終わり”について言及していることが見えてきます。

## Part Two

### ダニエル9：24（パワポ）

ダニエルは、神様に、自分の民イスラエル民族と自分の故郷首都エルサレムの復興を願いますが、

ここで神様は、神様の目的が、血縁によるイスラエル民族と地理的なエルサレムの復興にのみあるのではなく、むしろその復興を通して、血縁を超えた神を信じるすべての者たち、つまり霊的イスラエル民族と、地理的な限界を遥かに超えた霊的エルサレムの復興と完成にあることを教えてください。

つまり、「あなたの民とあなたの聖なる都」という表現が、血縁によるイスラエル民族と地理的な都エルサレムを、一義的に表す言葉ではないということです。

血統的イスラエルからすれば私たちは異邦人ですが、イエス・キリストを信じる者とされた時点で私たちは、神からすればもうこれ以上異邦人ではなく、血統的イスラエルを遥かに超えた別次元の霊的イスラエルとされた者たちです。

つまり、イスラエルという呼称は、神によって選ばれ、神によって救われ、神によって神の民とされた、すべての者たちの別称のようなものです。

神の宣教の目的は、血統的イスラエル民族を増やすことではなく、霊的イスラエルの民たちを集め導くことにあります。

そこには国境も無ければ、民族もありません。

言葉も、文化も関係ありません。

ただあるのは、「イエス・キリストを主と崇める者たちだ。」ということだけです。

だから、キリストを信じる信仰は、元々国際的で、時も空間も超えた霊的なものであり、目で見て、手で触れることの出来るものよりも、遥かに確かなものです。

ダニエルは、神様から、イスラエル民族とエルサレムの復興を通して、さらに大きく遙か先の霊的イスラエルと霊的エルサレムの復興と完成に目を向けて生きるように、諭されているわけです。

そして、キリスト教信仰が、ローカルな一宗教団体のようなものではなく、時空という限界を超えた霊的真理であることを悟るように促されているわけです。

これまで、宣教旅行で何度か海外に行ったことがあります。初めて会って、全く言葉も通じなければ、食べ物や着ている服も違ったりするのに、不思議なことに、その目の輝きを見てクリスチャン同士通じ合うことを何度も体験してきました。

クリスチャンだということ、一瞬にして、国籍や文化や背景などを超えて、神の民とされた霊的イスラエルであるということ、肌感覚で感じるわけです。

これまで、めぐみ教会でも何度か企画して、タイへの短期宣教旅行だったり、イスラエルやトルコへの旅行だったり、あと毎年行っているコイノニアだったり、海外のクリスチャンたちと交流する場がありましたが、そこには、必ず、すべての障壁を超えた霊的イスラエルとされていることを体験できました。

コイノニアは毎年行っていますが、それ以外でも、霊的イスラエル、霊的エルサレムを肌感覚で体験できるような短期宣教旅行など企画できるといいなあと個人的に思っていますので、ぜひ、お祈りください。

また、私たちのこの信仰共同体、教会、そして、土浦めぐみ教会という村は、ある意味、完成された霊的エルサレムの前味を味わえる場でもあります。

もちろん、私たち全員、未だに罪人でありますから、残念に思うことも少なからずあり、完成したエルサレムとは比較にならない部分が多々あると思いますが、

それでも、完成した霊的エルサレム、神の国の前味を味わえるこのめぐみ村の一員とされていることが、感謝で仕方ありません。

日曜日もちろんそうですが、平日のめぐみ教会を見ますと、本当にここはひとつの霊的な村だなあと心底感じます。

なので、この土浦めぐみ教会が、24節の御言葉にあるように、「背きをやめさせ、罪を終わらせ、咎の宥めを行い、永遠の義をもたらし、幻と預言を確証し、至聖所に油注ぎが行われる、つまり、完成した神の国の王となられるイエス・キリストへの油注ぎが行われる」聖なる都霊的エルサレムを見据えて歩む、祝福さ

れた信仰共同体であることを祈らずにはられません。

**ヨハネの黙示録 7 : 9 - 12 (パウポ)**

**21 : 1 - 7 (パウポ)**

ダニエルに示された霊的エルサレムの約束が、新約聖書に入って、ヨハネを通して、さらに具体的に、さらに明確に、さらにはっきりと、さらなる祝福として、新しい天と新しい地、聖なる都新しいエルサレムの到来が示され、また、そこに住まう者たちの礼拝を献げる姿と、子羊イエス・キリストが王座についておられる完成した神の国の確かな約束を記録しています。

イエス・キリストによって救われたというのは、聖なる都新しいエルサレムの一員として数えられる者となったということです。

だから、救いが必要なんです。

もしこの救いに与ることがないならば、それすべて、気泡に帰して終わってしまいます。

私たちの答えは、この地上、この世界にあるものではありません。

神様は、ダニエルに、霊的イスラエルの完成と霊的エルサレムの完成を悟り、気泡に帰すことがない人生を生かされていることを今一度、確信づけてあげるわけです。

なんと幸いなことでしょう。

気泡に帰す人生を生かされていない、救いに与っていることが。

### Part Three

ここで終われば、ハッピーな話だけで終われるのですが、ガブリエルを通してダニエルに与えてくださった言葉は、ここで終わってはいません。

**ダニエル 9 : 25 - 27 (パウポ)**

今ここでは、先に語られた70週を、7週と62週と1週に分け、さらに半週まで付け加えて、定められた時に起こる事柄について語っています。

ただ、その内容を見てみますと、そんなに喜ばしい言葉が並べられているわけではありません。

その言葉を挙げてみますと、

苦しみの期間、断たれ、何も残らない、破壊する、洪水が伴い、戦い、荒廃、忌まわしいもの、荒らす者、破滅、等々です。

ひと言で言いますと、“滅び”もしくは、“破滅という終わり”について語られています。

7週と62週と1週が、具体的に何を表し、いつの、どのことを言っているのかという解釈は、いくつかあります。

例えば、

以前私たちが学んだメディア・ペルシア王国の初代王キュロスのエルサレム再建命令から、ユダの総督ゼルバベルによってエルサレムの神殿が再建築されるまでを7週、そのエルサレム神殿再建築からイエス様が十字架に架けられる時までを62週、そして、明示されていない空白期間があり、最後の1週は、キリストの再臨があるまでの大患難期を指しているという解釈があります。

もう一つの解釈は、キュロス王の再建命令からイエス様の誕生までを7週、そして、イエス様による福音伝道、十字架の死、その後の教会の誕生と教会の世界的拡散までが62週、最後の1週は、偽キリストの出現とキリストの再臨の終末までを表しているという解釈です。

これ以外にも、ちょっとずつ違う解釈が、いくつもあるのですが、いずれにしても、そのすべての解釈で、共通しているのは、“滅び”です。

つまり、この世界には終わりが来るということです。

しかも、ただポケーツとしていれば、何の痛みもなく、いつの間にか至って自然な形で訪れるのが、“滅び”だとは言わずに、

苦しんで、断たれて、何も残らないで、破壊されて、洪水が伴って、戦いまであり、荒らす忌まわしい者によって、荒廃と破滅が定められているという、非常な痛みが付いてくることを指摘しています。

あたかも、私たちが生きている、この痛みの伴う世界を言い表しているようにも見えます。

そして、ここに出てくる、“油注がれた者”という言葉が、イエス・キリストを表しているということは、察しが付くと思います。

25、26節で、

**ダニエル9：25－26（パワポ）**

**油注がれた者、君主が来るまでが七週。**

**そして苦しみの期間である六十二週の間、広場と堀が造り直される。**

**その六十二週の後、油注がれた者は断たれ、彼には何も残らない。**

とありますが、私個人的には、ダニエルにこの御言葉が語られた時から主イエスが誕生した時までが7週、十字架の死と復活をもって終えられたイエス様のこの地上での33年間の生涯が62週、その後、イエス様が再臨される終末の時までを1週ではないだろうかと思っています。

7週に相当するダニエルの時代からイエス様の誕生までが538年、62週に相当するイエス様の生涯が33年、そして1週に相当するであろうキリストの復活から現代まで2000年と、

具体的な年数にしますと、相当アンバランスな解釈に見えますが、イエス様の成された十字架の贖いこそ、神の業の核であり、有史以来人類にとって最も深刻で重要な事件であることを考えますと、70週の内、イエス様の生涯が62週に相当することは当然だと思えてきます。

また、この解釈で生きますと、キリスト誕生から2000年間、人類はその文明と文化と教養と知識と技術を誇ってきましたが、神のものさしに照らし合わせると、高々1週にも満たない未熟で、未発達で、未開発で、欠点だらけの代物に過ぎないということが、皮肉なことに、浮き彫りになってきます。

#### Part Four

つまり、私たちは、

**ダニエル9：26－27（パワポ）**

**次に来る君主の民が、都と聖所を破壊する。**

**その終わりには洪水が伴い、戦いの終わりまで荒廃が定められている。**

**彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる。**

**忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる。**

という時代を生きているわけです。

ここにある、「次に来る君主」とは、一義的にはローマ皇帝やローマ帝国を表すと言われたりもしますが、それだけでなく、これまで歴史に名を残す君主や国から、特段歴史には名を残せなかった君主や国、または、政治、イデオロギー、企業、社会情勢に至るまで、ありとあらゆる、数多くの君主の民が現れ、都と聖所、つまり、まことの神を礼拝することを妨げ、まことの神を礼拝する者たちに、敵対心を抱き、もしくは蔑んできたことを表わす言葉であることは確かです。

また、「その終わりには洪水が伴い」という言葉は、正に、神の造られし天然世界を、自ら知者となつて、また知者だと自称し、知者のように振る舞い、開発という大義名分のもと破壊しまくって、異常気象を招き、日本を含めた世界各地で起こっている昨今の水害や日照りを連想させます。

そして、「戦いの終わりまで荒廃が定められている」という言葉は、何を目的に戦っているのかさえも、よくわからずに、闇雲に敵を定めては、戦い続けている私たち人間、そして現代人の姿まで連想させます。

さらには、「彼は1週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる」という言葉は、神を除いて自ら君主となっている人間と人間社会が、神に聖なるいけにえとささげ物を献げることがを軽んじ、自分にいけにえを献げ、自分に献げものをしながら、回っていることを思い浮かばせます。

ただ、残念で皮肉なのは、自分に献げられたどんな献げものも、その人を潤し、満足させることはありません。

人間が作り出した忌まわしいものだらけの世界を、さらに、忌まわしいもので満たそうとする者が、次から次へと現れ、それに人々はこれまた闇雲に、ついて行きます。

このダニエル9：26、27の言葉は、  
何もかもが、まことの神を崇めることではなく、偶像崇拜で回っている世界を、美しい世界だと、麗しい世界だと、希望のある世界だと、これでいいんだと自画自賛する世界だと、言い表しているようにも見えます。

まさしく、最後の一週に相当する時を、私たちは生きているんだということを、自覚せずにはられません。

### Conclusion

**ペテロの手紙第二3：4-15a (パウロ)**

**ペテロの手紙第一5：6-11 (パウロ)**

2500年前、ダニエルに語られた言葉は、今、ペテロが言っていますように、現代に生きる私たちにも効力があり、適用され、その真っ只中を生きていることを教えてくれます。

だから、ダニエルにさらなる悟りが必要であったように、私たちにもその悟りが必要なんです。

私が今生きているこの世界に答えはありません。  
神の答えは、イエス・キリストです。

ならば、この答えを握り締め、焦点を当てて、憧れながら生きるのが、私たちキリスト者です。

しばらくの苦しみの中で回復させ、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださり、永遠の栄光の中に招き入れてくださるその方を見上げて、今日も、今週1週間も歩んでいきましょう。

お祈りいたします。

祝祷：ダニエル9：25

それゆえ、知れ。悟れ。